

〈海外展望〉

直近に迫った朝鮮半島統一！

— 想像を超える速度で激変する世界 —

(2014年4月7日)

横田夫妻がウランバートルで孫娘と奇跡的な楽しいひとときを過ごしているとき、東京九段の朝鮮総連本部土地建物の売却先が決定された。その2週間後の3月26日、オランダのハーグで日米韓3カ国首脳会談が行われている最中に北朝鮮はミサイルを

発射。さらに北朝鮮は日朝局長級会談2日目となった3月31日にも、黄海の韓国との境界線付近で500発の砲弾、ロケット弾を撃っている。硬軟両面を覗かせる北朝鮮は、いったい何を考えているのか。半島情勢を分析すると衝撃の未来像が現出してくる。

核を手放さない北朝鮮

ソ連崩壊後の1991年(平成3年)に独立したウクライナには、ソ連時代の核兵器が大量に保管されていた。この核兵器流出が懸念された1994年、ウクライナは米露英等と「ブタペスト覚書」を交わし、核はすべてロシアに引き渡され、その代価としてウクライナは米露英から経済支援を受けることになった。

今年に入ってウクライナでは政権交代劇が起きたが、この事情は複雑ながら、ひと言で表現するなら「米国の火遊びが過ぎた」というところだろうか。核を手放したウクライナが世界の乱暴者たちから蹂躪されたという表現が適当かもしれない。

2011年(平成23年)にリビアで米国の策謀による政変が起き、カダフィが倒され

たとき、北朝鮮の高官は英国前大使ヒューズにこう語った。「カダフィが核を手放したから、リビアはNATO軍の空爆を受けたのだ」――。

手に入れた核を手放したら、強欲者たちの餌食になるだけ。飢え切った猛獣の檻に豊満な肉体を投げ入れるのと同じだということを、北朝鮮は知っている。戦後のソ中対立、東西冷戦の狭間を生き抜いた天才的外交手腕の持ち主である北朝鮮は、綺麗事だけでは生き抜けないことを重々理解している。そんな北朝鮮が核やミサイルを手放すわけがない。どんなに甘言で誘おうが、北朝鮮がこれらを手放すことはあり得ない。

「来年」を睨む北朝鮮

今年（2014年）1月1日、金正恩第一書記は国営テレビで新年の辞を述べたが、ここでは「分派の汚物を除去した」とか「唯一指導体系」といった言葉で張成沢粛清の正当性を強調し、また対南（対韓国）に関しては「核戦争の暗雲が絶えず垂れ込めている」と脅し文句を並べている。12月の張成沢処刑は世界中に衝撃を与え、そのためか誰もが第一書記の言葉の本質を捉えようとしていない。今年の新年の辞は例年になく異常な雰囲気満ちていた。新年の辞の中に「今年の話」が無かったのだ。

来年2015年は北朝鮮労働党創設70周年の節目の年である。それは朝鮮半島南北分断70周年でもある。記念すべき来年について夢を語ることは理解できるが、来年の話ばかりで今年の話が飛んでしまった新年の辞には、どこか違和感がある。

では来年2015年とは、朝鮮半島にとってどんな年なのだろうか。

在韓米軍が撤退する予定になっている。

「核」で脅し、統一交渉が始まる

北朝鮮が物理的に南進攻撃を仕掛ける可能性は、たしかに低い。

なぜかという、武器兵器の質の問題があるからだ。

人員面では北朝鮮のほうが韓国を圧倒している。北朝鮮の総兵員数190万人に対し韓国軍は総数65万3000人とされる。しかし北朝鮮軍の武器兵器は使い物にならないほど老朽化しており、現実には陸軍が南進攻撃を開始した場合、火力だけで韓国軍に圧

そして現在も経済的苦境が続く韓国は、日本の円安局面が続くなか浮上の芽は見えず、いよいよ経済崩壊が進み、今秋以降には国家的崩壊が起きると予想されている。

来年2015年に、北朝鮮が韓国に攻め込む可能性は高い。

攻め込むといっても軍事的に南進する可能性は少ない。

最も考えやすい手法としては、韓国世論を煽って政府を転覆させ、革命勢力が実権を手にするやり方だ。韓国内には庶民大衆の中に12万人の北朝鮮工作員が紛れ潜んでいると推定される。なかには20万人の工作員が潜入していると口にする情報通もいる。経済崩壊の中、反政府活動が起きたら、それは燃え上がる炎となり、臨時政府が成立する可能性は十分ある。その臨時政府が北朝鮮と統一交渉に入り、電撃的な南北統一があるかもしれない。クリミアの分離、ロシアへの併合といった最近の世界情勢を考え、韓国の一部地域が北朝鮮に併合されることも視野に入れておく必要がある。

倒され、戦争にもならないと推測される。

しかし陸軍が侵攻するのではなく、3月末に西海付近の境界線付近でやったような砲撃を、陸上の休戦ラインで行う可能性はある。現実には北朝鮮軍は今冬、休戦ライン近くの韓国軍前方警戒哨所を攻撃する訓練を実施しているのだ。北朝鮮軍の挑発に乗って韓国軍が応戦すれば、北朝鮮は近距離ミサイルを放ち、さらに核を使用するといった脅しをかけてくるだろう。そうなった

ら世界は南北会談開催の圧力を両国にかけ、交渉が始まる。北朝鮮の「核圧力」によって開始された交渉であれば、圧倒的に北朝

鮮主導となる。経済問題で足元が揺らいでいる朴政権が大幅な譲歩を重ね、一気に南北統一が進む可能性も十分考えられるのだ。

朝鮮総聯本部問題の深奥

競売にかけられた東京千代田区の一等地にある朝鮮総聯の本部土地、建物は、昨年（2013年）3月に最福寺（池口恵観）が落札したが、最福寺側が資金調達不能に陥り購入を断念。昨年10月に再入札が行われた。この10月の入札ではモンゴルのアバー

ル・リミテッド・ライアビリティという企業が50億1000万円で落札。一件落着かと思われたが、なかなか売却許可が下りず、今年1月になって東京地裁は「実体のない企業、書類不備」を理由に売却を認めない決定を下した。モンゴルの企業に関しては初めから怪しい噂が流れていた。ビルの一室にあるペーパーカンパニー同然の企業が50億もの資金をどうやって調達するのか。背後に北朝鮮がいるのではないか。あるいは日本政府が絡んでいるのではといった情報が乱れ飛んでいた。売却不許可となり、モンゴルのアバー社は東京高裁に不服申し立てを行ったが、この時点で日本中のマスコミは「3回目の競売が行われる」と報道していた。

ところが3月24日に東京地裁は3回目の競売は行わずに、香川県のマルナカホールディングスへの売却を決定した。地裁のこの判断は、正直なところ適正か否か、判断に苦しむところだ。マルナカはアバー社が落札した時点で供託金の返納を受け、購入資格があるかどうかとも難しいものだった。

マルナカへの売却決定に対し朝鮮総聯側は、以前と同様に「総聯会館は同胞の事業や生活の拠点で、現実的に外交代表所（大使館）の役割を果たしている」として即日、東京高裁に対して執行抗告を申し立てている。

こうした流れは全体としては理解できるもので、新聞テレビなどを見て理解されていることだろう。だがこの奥に、どうしても不可解な動きが存在している。それはひと言でいえば「朝鮮総聯側に熱意がない」ことだ。あわせて日本側にも、スッキリと明快に解決しようとする意欲が感じられない。

総聯側はRCC（整理回収機構）が本部の土地建物を競売にかけるといい始めた2008年ころから激しく抵抗し、2012年に東京地裁が競売開始決定を出したときには猛烈な抗議活動を行ったものだった。昨春、最福寺（池口恵観）が落札したときにも、その主張は強烈なものだったが、トーンが少し落ちていた。総聯も諦め始めたのかもしれないといった憶測が流れ始めていた。今回、マルナカホールディングスに売却が決定すると、総聯側はたしかに強い口調で抗議をしているが、以前とはまったく違っている。熱く燃える運動ではなく、表面上、形式上の抗議のように感じられる。

その理由として2つが考えられる。1つは北朝鮮の最高人民会議代議員の決定までの「時間稼ぎ」。もう1つは、大使館として

機能してきた総聯本部ビルとは別な大使館

を作る意欲があるということだ。

朝鮮総聯と北朝鮮の関係

朝鮮総聯は、南朝鮮（韓国）に革命を起こすことを目的として存在していた。その目的ゆえに、かつて総聯は北朝鮮の対外連絡部の下部組織だった。対外連絡部の部長は姜周一で、その上に金正日が君臨していた。全盛時には60万人の在日朝鮮人が南朝鮮革命のために活動していたものだった。

現在、総聯を指導するのは225号室とよばれる機関で、昨秋から225号室は統一戦線部に編入されたとの情報もある。亡命した米NSAのスノーデンは、「北朝鮮の内情はどの国の機関もまったく把握していない」と語っているが、じっさい北朝鮮の実情は不透明で、統一戦線部、対外連絡部、225号室の力関係も推測の域を出ることはない。しかし225号室であろうが統一戦線部であろうが、そのトップが金正恩第一書記であることに変わりはない。総聯の人事は金正恩第一書記が批准することになっているのだ。

その総聯で今年の5月に大幅な昇格人事が行われるとの情報がある。総聯のメンバーから4人が最高人民会議代議員（日本の国会議員に相当）に昇格するというのだ。総聯本部の土地建物問題をずるずると引き延ばし、この昇格人事が決定してしまえば、あとはどうなろうと関係ない。とりあえず執行抗告などを行って、総聯本部問題が5月いっぱい宙に浮いていれば、昇格人事の妨げにはならない。だから総聯関係者にかつてのような熱意が見られないというのだ。

総聯にとっては、昇格人事だけが重要なわけではないが、この推測はある意味で正しいと考えられる。だがその奥に、さらなる問題が残る。

現在、総聯の許宗萬責任議長は総聯唯一の最高人民会議代議員だ。

5月の昇格人事で南昇祐副議長や張昞泰朝鮮大学校校長の他、青商会幹部や民主女性同盟委員長までもが最高人民会議代議員に昇格するという。

現在、ただ一人の代議員である許宗萬議長は長らく故国北朝鮮に帰国していない。

なぜなら、現在日本は北朝鮮に対しヒト・モノ・カネの移動を極端に制限する制裁措置を採っている。代議員である許宗萬議長が帰国したら、二度と日本には戻れないのだ。そのため、総聯と北朝鮮本国との緻密な連絡のために、南昇祐副議長が北朝鮮に帰国して打ち合わせをする状況が続いていた。その南昇祐までが代議員に昇格したら、いったい誰が北朝鮮に帰国して打ち合わせを行うのだろうか。

考えられることは、ただ一つ。日本政府が間もなく制裁を解除するという予測が総聯側にあることだ。経済制裁はまだ継続されるかもしれないが、少なくとも人的交流、人の往来は認められると総聯・北朝鮮が予測していることが理解できる。それは横田夫妻のウランバートル行きにも関係していたのだろう。それについては後で見ることにする。

北朝鮮大使館として機能していた総聯本部

朝鮮総聯が本部建物について、「総聯会館は同胞の事業や生活の拠点で、現実的に外交代表所（大使館）の役割を果たしている」と主張するが、この言い分は間違っていない。だが現実には総聯本部の土地建物がマルナカに売却決定されても、総聯は以前のように猛烈な抗議を行わない。明らかに熱意が見られない。その理由を考えてみたい。

昭和47年（1972年）9月、田中角栄首相が北京を訪れ、日中国交正常化が実現。10月には中国からパンダが贈られ、翌年1月には北京に日本大使館が、2月には東京に中国大使館が作られた。

日中国交正常化以前には、日本は中華民国（台湾）を中国国家として認め、大陸の

中華人民共和国は認めていなかった。それが日中国交正常化を以て逆転したのだ。

同じことが北朝鮮、韓国でも起きる可能性がある。

韓国が北朝鮮に併合される、あるいは朝鮮半島が統一されたら、韓国大使館はどのような扱いになるのか。

絵空事の話ではない。少なくとも北朝鮮は本気で来年に半島統一が成就されると考えている。半島が統一されたら、大使館は一つでいい。南麻布にある韓国大使館が統一朝鮮の大使館になるわけだ。総聯側が九段の本部土地建物に対する執着心を失い始めた理由は、ここにある可能性が高い。

横田夫妻ウランバートル行き裏側

3月10日から14日までの5日間、横田滋、早紀江夫妻がモンゴルのウランバートルで孫娘のキム・ウンギョンさんと生後10カ月になる曾孫と会い、「本当に夢のような感じだった」（早紀江さんの話）ひとときを過ごした。夫妻のウランバートル行きには、しかし、数々の問題が隠されている。

北朝鮮は平成14年（2002年）に拉致を認めたときから、横田めぐみさんはすでに死亡したといい続けてきた。そしてめぐみさんの子ウンギョン（ヘギョン）さんを出現させ、「おじいさん、おばあさんに会いたい」と映像で語りかけた。

北朝鮮側は「横田めぐみさん死亡確定」を以て「拉致問題は解決」としたいのだ。なにしろ神様同然の故・金正日総書記が、

一旦は頭を下げて拉致を認め、そのうえで生存する拉致被害者5人を帰国させ、残る被害者8人は死亡したと明言したのだ。横田めぐみさんは死亡した8人の中に含まれており、彼女の「死」は絶対のものなのだ。

そこで北朝鮮は、横田夫妻を平壤に招こうとした。めぐみさんが生活していた空間を夫妻に公開し、さまざまな形で残るめぐみさんの痕跡を示し、元夫である金英男や孫娘のキム・ウンギョンとも会わせ、「めぐみさん死亡」を納得してもらおうと考えたのだ。ところが夫妻の平壤行きにはいろいろな層から猛反対の声があがっていた。

表面的に大反対したのは「救う会（拉致被害者協議会）」であり、この思想に「拉致被害者家族会（当初は横田滋代表）」も合流

していた。「救う会」は拉致被害者全員を日本に帰国させることを目的とし、そのためには「北朝鮮の国家体制を崩壊させる以外に道はない」と考えていた。北朝鮮に対する制裁措置も、思考の上にある。この考え方に多くが合流し、横田夫妻が平壤に行ったり、あるいは平壤でなくとも夫妻が孫娘などに会うことを反対する勢力は多い。

横田夫妻の平壤行きだけではなく、日朝国交正常化そのものに反対し、日朝が密着することに神経を尖らせている国々も非常に多い。米国や中国、韓国などがその代表だが、とくに米韓は日朝が秘密に会合したり意見調整することに、恐ろしく苛立って

安倍晋三の強い思惑が働いた

じっさいのところ、横田夫妻と孫娘がモンゴルで面会するという計画は、すでに民主党政権下でも模索されていた。これが大きく前進したのは昨年（2013年）9月のことだった。

昨年5月には内閣官房参与の飯島勲が平壤を訪問して北朝鮮 NO. 2 の金永南最高人民会議常任委員長と面会している。しかしその後、飯島参与は横田夫妻が孫娘と会うことに反対していた。会うことでめぐみさんの死が肯定され、拉致問題そのものが収束方向に向かうことを危惧していると考えられる。

昨年9月7日にアルゼンチンのブエノスアイレスで2020年の五輪開催地を決定するためのIOC総会が開催された。ご存じの通りここで「東京五輪」が決定したが、このとき安倍晋三はブエノスアイレスで北朝鮮のIOC委員と政府高官に会い、

こうした国々の思いが、マスコミを通じ、あるいはさまざまな形で「救う会」や「家族会」に圧力となって押し寄せていたことは想像に難くない。

こうしたなか、日本政府は北朝鮮に対し、横田夫妻と孫娘が「第三国で会う」という提案を出していた。日本政府のこの提案に、当初北朝鮮は反対し、あくまでも夫妻を平壤に招待するといひ続けた。孫娘のキム・ウンギョンさんも同様に「平壤に来てほしい」と発言していた。夫妻と孫娘の面会がモンゴルのウランバートルで、しかも5日間という長期にわたって実現したウラには、日本政府の工作があった。

長時間の話し合いをしている。余談になるがこのとき、北朝鮮は東京に投票している。

その直後の9月11日から14日まで、モンゴルのアルタンホヤグ首相が来日し、安倍晋三と長時間会談を行っている。推測の域を出ないが、ブエノスアイレスと東京で、横田夫妻訪蒙の綿密な打ち合わせが行われたと考えていいだろう。その後、昨年11月と今年1月にアントニオ猪木議員が北朝鮮を訪問しているが、ここでもウランバートルでの邂逅に関する話し合いがなされたはずだ。そして今年1月25日と26日にベトナムのハノイで極秘の日朝事務方レベルの会談が行われている。これが最後の「詰め」だったようだ。あるいは3月3日に行われた日朝赤十字交渉にも外務省係官が同席していたから、話し合いが行われた可能性もある。

いずれにしても「横田夫妻ウランバートル

ル行き・孫娘と面会」というプログラムは、さまざまな反対意見が交差するなか、安倍晋三が強引に作り上げたものなのだ。その安倍晋三が「平壤以外の第三国で会う」と

激変する世界は日本にとって「好機到来」か

北朝鮮が3月末に境界線付近で砲撃を行い、一部が韓国領内に着弾する騒ぎがあった。日本のマスコミの多くは「ハーグの日米韓会談に対する嫌がらせ」程度に捉えているが、韓国に対する本格的攻撃の演習と見たほうが正しいだろう。

また日本のマスコミを見る限り、中国や韓国の主張が世界の主張のように思われるかもしれないが、現実には逆だ。いま習近平中国は孤立化を深め、韓国を取り込んでなんとか体面を保っている状況にある。中韓両国は連携して日本に対する締め付けを強め、日本のマスコミもそれに乗って日本がアジアで孤立しているような表現をしているが、これは日朝国交正常化にとっては追い風となるだろう。

中韓だけでなく、米国も日朝国交正常化には反対しており、日朝間がこのまま順調にすんなりと正常化交渉に臨めるとは、到底思えない。しかし北朝鮮の核をめぐる6者協議もまた完全に暗礁に乗り上げている。そもそも6者協議とは「核・ミサイル・拉致」を同時に解決するための協議である。そして日本以外の国は「拉致」にはほとんど興味を示していない。拉致以外の「核・ミサイル」については冒頭に述べた通り、北朝鮮がこれらを放棄することなど絶対にあり得ない。

つまり常識的にも、理論的にも、6者協

いう計画について北朝鮮から了解を得るために、制裁の一部解除を約束したのではないだろうか。

議で拉致問題が解決したり、解決の糸口が見つかることはないのだ。解決できない6者協議をアテにすることは無意味なのだ。それは当然ながら日朝2国間協議へと向かわせる。今秋までに安倍晋三の電撃的平壤訪問は可能性が高いと見ていいだろう。

朝鮮半島が北朝鮮主導による統一方向に向かうことは、これまで見てきた通り、非常にあり得るものだが、なかには首を傾げる諸氏も多いだろう。そうした諸氏に考えていただきたいのは、世界がいま猛烈なスピードで変貌していることだ。戦後教育を受け、東西冷戦の最中を生き抜いた人々の中に、なんとなく「米欧は正しく、ロシア（ソ連）中国は悪」といった雰囲気があったのではないだろうか。だが最近の世界情勢を見る限り、これは逆転し、米欧が悪で中露が正しく振舞っているように感じられる。それを明確に示したのがウクライナ問題だった。

ウクライナ問題は、まだ終わっていない。そしてそれは巨大な潮流の変化を示している。ウクライナ問題は「グローバリズム対ナショナリズムだ」と分析する者もいるが、その視点はかなり正しい。またウクライナ問題から米ロ対立、いや米欧とロシア中国とが金融界で対立することになりそうだ。この対立は最終的に世界の金融システムそのものを破壊してしまう可能性すら含んで

いる。

世界は途轍もない激変期にさしかかっている。

これをチャンスと見るか、危機と見るか。日本はどちらに転がるのか。緊張と興奮の春が幕を開けたようだ。■